

「X線鑑別診断マニュアル」 Aids to Radiological Differential Diagnosis

Stephen Chapman, Richard Nakielny 著
東京都済生会中央病院放射線科医長 古 寺 研 一 訳
東京都済生会中央病院放射線科 金 田 智 訳

東邦大学教授

平 松 慶 博

本書の序にも書かれているように、疾患の診断の過程において、ある特定の疾患である可能性を、まず念頭に思い浮かべることが重要であるが、往々にして、鑑別診断のリストの枚数が不完全で、まれにしか遭遇しない疾患を、すっかり忘れてしまうこともある。この傾向は特に初心者において強いことは言うまでもない。これに対する対策として、疾患群の頭文字を並べて憶える方法などがあるが、すべての疾患について、その鑑別疾患を完璧に憶えるなどということは、無論不可能なことである。

有名な Felson (残念ながら昨年亡くなられた) および Reeder の著した “Gamut in Radiology” はいわば鑑別診断のバイブル的なもので、放射線科医ならば誰でも知っている名著であるが、あまりにも内容が多すぎて、実際のでない部分もある。

Chapman および Nakielny に

る “Aids to Radiological Differential Diagnosis” は, “Gamut in Radiology” のように, 単に疾患名をアルファベット順に並べるのではなく, 炎症とか腫瘍とかのカテゴリー別に分け, かつ主要な疾患については X 線所見を記している点で大いに異なるものである。更に第 2 部として, 特に重要な疾患について, くわしく述べていることも, 単なる鑑別診断のリストではなく, 教科書としての要素を持つものである。

本書は元来, その対象を放射線科専門医試験を間近にひかえた, かなり臨床経験を積んだ放射線科医としている。本書が著された英国と, わが国の放射線科医の内容には大いに差異がある。特にわが国においては, 欧米と異なり, bone radiology の占める割合が非常に少ない。つまりわが国においては, bone の診断に関与している放射線科医はごく一部に限られているが, 欧米では

bone radiology が放射線診断の重要な部分を占めている。したがって, 本書においても bone の section が, かなりの割合を占めているが, このことは bone に弱いわが国の放射線科医にとっては, むしろ歓迎すべきことなのかもしれない。

疾患名, 所見がすべて和訳されていることは, 英語を読み慣れていない読者にとっては読みやすいかもしれないが, わが国においても, 放射線科医として専門医を目指す者ならば, このくらいの診断名と X 線所見が英語で理解できないはずはなく, もしそうでないとしたら, 英語でしっかり憶えておいてほしいものである。したがって, 本書の構成は素晴らしく, 放射線科医にとっても, 座右に置いて役立つ書であることはもちろんであるが, この書のような, 簡単な読みやすいものを, あえて和訳して出版する必要があるかという点に疑問がある。諸外国と違い, わが国では放射線科医が不足しているために, 放射線科医以外の医師が放射線診断に携わっているのが現状であり, 本書はそのような医師のためにも役立つものであろう。また放射線学に興味を持つ医学生が本書に接することにより, 放射線医学のとりこになるのなら, 更に大きな意義があろう。

A 5 判 372 頁 図 83 1989

定価 5,562 円(税込) 〒 300

—医学書院 刊